

いじめの予測について

倉本 英彦*

いじめについての母子認知の相違を知りいじめの確率予測式を導くことを目的として、1995年7月から9月にかけて、261人の中学生とその母親にいじめ・いじめられに関する質問紙調査を実施した。子どもには過去一年間のいじめ・いじめられの経験とそれらの内容と頻度を、母親にはラター親用質問紙による過去一年間の子どもの情緒障害や問題行動について、それぞれ尋ねた。

母親の認知については、いじめ・いじめられともに特異度は十分に高かったが、敏感度はいじめ11.7%・いじめられ33.3%と低く、特に子どもが他の子はいじめることを母親が見落としがちな傾向がみられた。

子ども自身のいじめ・いじめられの申告により、全体(254人)をいじめ群(80人)と非いじめ群(174人)に分け、さらに前者を加害群(37人)、被害群(20人)、混合群(23人)に分けた。ラター親用質問紙の平均得点を比較すると、被害群(7.4点)と混合群(7.1点)が近接しており、加害群(4.6点)はむしろ非いじめ群(3.8点)に近かった。

いじめの予測については、子どものいじめ・いじめられの有無を従属変数として、性、学年とラター親用質問紙項目(遺尿と遺糞は除く)の得点を独立変数としたロジスティック回帰分析を施行して、それぞれの項目の回帰係数を求めた。 A_i を回帰係数(A_0 は定数)、 X_i を項目得点とすると、いじめ・いじめられの確率は次式で求められる。

$$P = \{1 + \exp(-Z)\}^{-1} \quad \text{ただし, } Z = A_0 + \sum_i A_i \cdot X_i$$

このロジスティック・モデルを母親による評価と比較すると、特異度は依然として高く、敏感度はかなり改善し、特に他の子にいじめられたことについては半数近くの正確さを認めた。子どもの口から語られないために自殺などの悲惨な結末に至ることがあるいじめという現象の早期発見のために、この簡便なモデルが適用可能と思われた。

Key words: いじめ、いじめられる、中学生、母子認知差、予測、ロジスティック回帰

I はじめに

子どもにいじめがあるかどうかを見極めるのは簡単なことではない。江川¹⁾は、いじめ発見が遅れ深刻化しやすい理由として、①そもそも問題がいじめだから、②たかが「いじめ」と思う甘さ、③うちの子・クラスに限ってと思う心理、④チクリの仕返し怖いから、⑤弱い子にもプライドがある、⑥教師や親に対する不信任、の6点をあげている。しかし、親や教師がいじめを見逃してしまったために自殺などの悲惨な結末を招いてしまったケースが、昨今、全国で数多く起こっているのは残念なことである。

したがって、子どもの様子からいじめが起きて

いることを予想して、早めに適切な対処することが望まれる。これまで、いじめられっ子の特徴²⁾、いじめっ子の特徴³⁾、いじめっ子・いじめられっ子の性格傾向⁴⁾、学校や家庭でわかるいじめの徴候⁵⁾など、いじめの早期発見につながるさまざまな手がかりが提出されてきた。が、それらの試みにも関わらず、いじめは減少するどころか、ますます陰湿化、拡散化や重層化の傾向を強めて増加している感がある。

以前、著者は一般小中学生の母親への疫学調査^{6,7)}を実施したが、その際にいじめを「いじめる」と「いじめられる」に分け、母親からみた両者の年代的推移や精神保健上の特徴を浮き彫りにした⁸⁾。しかし、子ども自身への調査が欠落していたため、いじめの真相の把握という点で不完全であったことは否めない。今回の研究では、いじめが特に問題視されている中学生にいじめの経験の有無を問い、母親による子どもの精神保健に関

* 北の丸クリニック

連絡先: 〒102 東京都千代田区九段北 4-3-26
政文堂ビル 6F 北の丸クリニック 倉本英彦

する評価と照合した。

その目的は、第一に、いじめ・いじめられの評価について母子の認知の相違を知ることであり、第二に、子ども自身のいじめ・いじめられの申告をもとにして、母親による子どもの情緒障害や問題行動の評価からいじめ・いじめられをおおまかに予測できる式を導くことである。

Ⅱ 対象と方法

1. 対 象

対象者は、千葉県某市内の公立中学校に在籍する中学生189人とその母親（一般群とする）、および著者の知人・友人を通じて協力してくれた中学生72人とその母親（知人群とする）、計261人である。表1に、両群の学年・性別人数と、一般群については各々の回収率を示す。

2. 調査方法

母親用（付録1）と子ども用（付録2）の調査票を、一般群には教室で配り、知人群には直接母親や子どもに手渡し、無記名で別々にその場や家庭で記入してもらい、それぞれを封筒に密封して回収した。その際に母親と子どもが一致するように、通し番号をふるか、あるいは回収時に大きな同じ封筒に入れるなどの工夫をした。調査は1995年の7月から9月にかけて行った。

調査票は、母親用はラター親用質問紙（以後、ラ氏テストとする）の日本語版⁹⁾、子ども用はいじめ・いじめられの体験の有無とそれらの内容と頻度を、それぞれ過去1年間について尋ねたものである。いじめ・いじめられという用語は定義せずに使ったが、それらの具体的内容については文部省の資料¹⁰⁾に基づいて作成した。なお、今回の研究の目的は一般中学生のいじめ・いじめられの頻

度を求めることではなく、いじめ・いじめられの予測式を求めることなので、なるべく回答がしやすいように子どもの性と学年以外の背景情報は入手しなかった。

3. 分析方法

まず、いじめ・いじめられについて、母子の認知の相違をみるためにクロス集計を行い、それぞれの敏感度と特異度を算出した。次に、子どもの申告によるいじめ・いじめられのクロス集計を行い、それぞれの有無により全体を3群に分けて、それらのラター親用質問紙得点（以後、ラター得点とする）を比較した。その次に、子どものいじめ・いじめられの訴えの内容と頻度を検討した。さらに、いじめ・いじめられの確率予測式を導くために、子どもの申告によるいじめ・いじめられの有無を従属変数として、性・学年とラ氏テスト項目を独立変数とした場合のロジスティック回帰分析（強制投入法）を実施した。

なお、対象者には一般群と知人群があったが、両群を比較することは今回の研究にとって本質的な意味を持たないので、両群をいっしょにして分析を進めた。また、データの解析にはSPSS for Windowsを用いた。

Ⅲ 結 果

1. ラ氏テスト得点

表2に、子どものこの1年間の行動の様子を母親が評価したラ氏テストの各項目の得点の度数分布を示す。表中の項目にあるN、Aは、それぞれラターが定義した神経症項目、反社会項目である。1～31番までの項目の得点を合計したラター得点は4.46±4.69点（平均±標準偏差；N=249）であった。なお、「4. 尿失禁」と「5. 便失禁」の項

表1 対象者

	1 年		2 年		3 年		計	
	一般群	知人群	一般群	知人群	一般群	知人群	一般群	知人群
男	38(100%)	13	25(64.1%)	10	31(91.2%)	10	94(84.7%)	33
女	36(100%)	12	31(93.9%)	13	28(84.8%)	14	95(93.1%)	39
計	74(100%)	25	56(77.8%)	23	59(88.1%)	24	189(88.7%)	72
計	99		79		83		261	

注) 一般群は公立中学校での調査における回収者数（回収率）を示す

付録1 お母さん用アンケート

以下の項目は、お子さんの行動についておききするものです。

この一年間に、各質問に当てはまる行動が確実に見られた場合は、「よくある」または「よくあてはまる」に、より程度が弱い、より少ない場合は、「少しある」または「ややあてはまる」に、また、お母さんからみてそのような行動がみられなかった場合には、「ない」または「あてはまらない」に、ひとつだけ○をつけてください。

記入日： 年 月 日

お子さんの性別はどちらですか？

1. 男 2. 女

お子さんの学年を教えてください。

() 年生

	ない	少しある	よくある
1. 頭痛を訴える……………	1	2	3
2. 腹痛がある、あるいはおう吐する……………	1	2	3
3. ぜん息がある……………	1	2	3
4. 夜尿がある、あるいは日中おしっこをもらす……………	1	2	3
5. 大便をもらす……………	1	2	3
6. かんしゃくをおこす……………	1	2	3
7. 登校時に泣く、あるいは学校の中に入るのをいやがる……………	1	2	3
8. 理由なく学校を休む……………	1	2	3
9. どもる……………	1	2	3
10. ほかに、話し方に問題がある……………	1	2	3
11. ものを盗ったことがある……………	1	2	3
12. 好き嫌い、食べない、食べ過ぎるなど、食事の問題がある……………	1	2	3
13. 寝つきが悪い、夜中に目をさます、早朝く目をさますなど睡眠の問題がある……………	1	2	3

	あてはまらない	ややあてはまる	よくあてはまる
14. とても落ち着きがない、しばしば走り回ったり、とびはねたりする。じっとして いることがほとんどない……………	1	2	3
15. もじもじ、そわそわしている……………	1	2	3
16. しばしば自分や人の持ちものをこわす……………	1	2	3
17. しばしばほかの子とけんかする……………	1	2	3
18. ほかの子に好かれていない……………	1	2	3
19. 心配症で、しばしばいろいろなことを悩む……………	1	2	3
20. 一人で物事をする。一人ぼっちの傾向がある……………	1	2	3
21. いらいらしている。すぐにおこりだす。……………	1	2	3
22. しばしばみじめそうな様子をみせたり、涙ぐんだりする……………	1	2	3
23. 顔をしかめたり、体をピクピクさせたり、チックがある……………	1	2	3
24. しばしば指しゃぶりを……………	1	2	3
25. しばしば爪かみをする……………	1	2	3
26. しばしば親のいうことに従わない……………	1	2	3
27. 注意を集中できない……………	1	2	3
28. 新しい物事や状況をおそれたり、心配したりする……………	1	2	3
29. とるにたらないことを騒ぎたてる……………	1	2	3
30. しばしばうそをつく……………	1	2	3
31. ほかの子をいじめる……………	1	2	3
32. ほかの子にいじめられる……………	1	2	3

付録2 お子さん用アンケート

以下は、あなたご自身のことについておうかがいするものです。

あてはまる番号に○をつけるか、あるいは数字か文字を記入してください。

記入日： 年 月 日

- A. あなたの性別はどちらですか？ 1. 男 2. 女
- B. 何年生ですか？ () 年生
- C. この一年間に他の子にいじめられたことがありますか？ 1. ある 2. ない
- D. (この問いには、問いCで「ある」に○をつけた人だけが答えてください。「ない」に○をつけた人は、問いEに進んでください。)

どんないじめを受けましたか？あてはまるものにいくつでも○をつけてください。

また、一番つらかったものについては◎をつけてください。

さらに、その頻度を、下の例にならって、あてはまるところに×をつけてください。

1時間
に1回

1日
に1回

1週間
に1回

1ヶ月
に1回

1学期
に1回

1年
に1回

例 ○○されたのは1週間に2,3回

1. 冷やかされたり、からかわれた
2. グループに無視された
3. 仲間はずれにされた
4. ことばでおどされた
5. 持ち物をかくされたり、こわされた
6. 暴力をふるわれた
7. お金などをたかられた
8. その他

(具体的に：

- E. この一年間に他の子をいじめたことがありますか？ 1. ある 2. ない
- F. (この間には、問い E で「ある」に○をつけた人だけが答えてください。)

どんないじめをしましたか？あてはまるものにいくつでも○をつけてください。

また、その頻度を、問い D と同じように、あてはまるところに×をつけてください。

1時間
に1回

1日
に1回

1週間
に1回

1ヶ月
に1回

1学期
に1回

1年
に1回

1. 冷やかしたり、からかった
2. グループで無視した
3. 仲間はずれにした
4. ことばでおどした
5. 持ち物をかくしたり、こわした
6. 暴力をふるった
7. お金などをたかった
8. その他

(具体的に：

表2 ラター親用質問紙得点分布

番号	項 目	0 点	1 点	2 点
1	頭痛	190	57	13
2	腹痛	211	41	9
3	喘息 (N)	240	18	3
4	尿失禁	257	2	2
5	便失禁	259	1	0
6	かんしゃく	193	57	11
7	登校時泣く (N)	250	9	2
8	学校を休む	252	7	2
9	どもる	254	7	0
10	話し方に問題	241	19	1
11	盗む (A)	251	8	1
12	食事の問題	187	68	6
13	睡眠の問題 (N)	227	31	3
14	落ち着かない	245	14	2
15	もじもじ	251	9	1
16	物をこわす (A)	241	19	1
17	けんかする	234	24	3
18	好かれない	239	16	3
19	心配症 (N)	182	72	6
20	孤独	226	28	7
21	いらいら	168	84	9
22	みじめそう	249	10	1
23	チック	250	8	3
24	指しゃぶり	253	5	3
25	爪かみ	235	18	8
26	従わない (A)	128	115	18
27	注意散漫	188	63	9
28	こわがる (N)	177	79	4
29	騒ぐ	236	21	4
30	うそをつく (A)	223	35	3
31	いじめる (A)	251	8	2
32	いじめられる	239	15	6

表3 「いじめる」の母子認知

母 子	得 点			合 計
	0	1	2	
な し	192	1	1	194(76.4%)
あ り	53	7	0	60(23.6%)
合 計	245	8	1	254(100%)

注) 1. 母の得点：0＝あてはまらない，1＝ややあてはまる 2＝よくあてはまる
2. 敏感度＝(7+0)/60＝11.7%，
特異度＝192/194＝99.0%

表4 「いじめられる」の母子認知

母 子	得 点			合 計
	0	1	2	
な し	207	3	2	212(81.5%)
あ り	32	12	4	48(18.5%)
合 計	239	15	6	260(100%)

注) 敏感度＝(12+4)/48＝33.3%，
特異度＝207/212＝97.6%

敏感度は11.7%であった。また，子どもが「なし」と答えたうちの母親が「あてはまらない」とした特異度は99.0%であった。

2) 「いじめられる」について

表4に，「ほかの子にいじめられる」についての母親の3段階評価と，「他の子にいじめられたことがありますか」について子どもが「はい」，「いいえ」で答えた結果のクロス集計を示す。敏感度は33.3%，特異度は97.6%であった。

3. 子どものいじめといじめられの関係

表5に，子ども自身の申告による「いじめる」と「いじめられる」のクロス集計を示す。全体を，前者のみ「あり」とした純加害群 (N＝37)，後者のみ「あり」とした純被害群 (N＝20)，両者を「あり」とした混合群 (N＝23) と，両者とも「なし」とした非いじめ群 (N＝174) に分ける。それぞれの割合は，非いじめ群68.5%，純加害群14.6%，混合群9.1%，純被害群7.9%の順であった。また，それぞれのラター得点を比較すると，純被害群 (7.37±6.89点)，混合群 (7.05±6.38点)，純加害群 (4.64±3.24点)，非いじめ群 (3.77±4.19点) の順であった。

目は陽性率が低く，また著者の中学生への調査⁶⁾でも陽性率がそれぞれ0.8%，0.6%と低値であったことから，中学生には適さない項目と考え，以後のいじめ・いじめられ確率予測式導出の際の独立変数からはそれらを除くことにした。

2. いじめ・いじめられの母子の認知

1) 「いじめる」について

表3に，「ほかの子をいじめる」についての母親の3段階評価と，「他の子をいじめたことがありますか」について子どもが「はい」，「いいえ」で答えた結果のクロス集計を示す。子どもが「あり」と答えたうちの母親が「あてはまる」とした

表 5 「いじめる」と「いじめられる」の関係

い じ め る	いじめられる			合 計
	な し	あ り		
	な し	174	20	194
あ り	37	23		60
合 計	211	43		254

注) 純加害群=37/254=14.6%
純被害群=20/254=7.9%
混 合 群=23/254=9.1%

4. いじめ・いじめられの内容と頻度

1) 「いじめる」について

表 6 に、子ども自身の申告による「他の子はいじめる」の内容とそれらの 1 年間の頻度を示す。「1. 冷やかし、からかい」が最も多く、「いじめた」事例の半数以上を占めた。「2. 無視」、「3. 仲間はずれ」などの心理的苦痛を確実に与える方法は 3 割以上あった。「4. おどし」、「5. 持ち物

隠し壊し」などの身体的でない攻撃は 1 割以上あり、直接身体に攻撃を加える「6. 暴力」は 2 割以上あった。

2) 「いじめられる」について

表 7 に、子ども自身の申告による「他の子にいじめられる」の内容とそれらの 1 年間の頻度を示す。「1. 冷やかし、からかい」が「いじめられた」事例の 8 割以上、「2. 無視」、「3. 仲間はずれ」が 4 割以上を占め、「5. 持ち物隠し壊し」、「6. 暴力」、「4. おどし」と続いた。内容的な順序については「いじめる」とだいたい同じであったが、各項目とも「いじめる」よりも訴えの割合が目立って多く、その回数もより頻繁な傾向があった。

5. いじめ・いじめられの予測式

1) ロジスティック回帰式

表 8 に、「他の子はいじめる」と「他の子にいじめられる」の予測のロジスティック回帰式の係数を示す。子どものいじめ・いじめられの申告を従属変数（なし=0、あり=1）として、性（男

表 6 「他の子はいじめる」の内容と頻度（複数回答）

内 容	1/時間以下	1/日以下	1/週以下	1/月以下	1/学期以下	無記載	合計 (N=60)
1. 冷やかしたり、からかった	6	12	8	4	3	1	34(56.7%)
2. グループで無視した	3	8	2	3	4		18(30.0%)
3. 仲間はずれにした	2	9	2	3	5	1	22(36.7%)
4. ことばでおどした	1	2		3			6(10.0%)
5. 持ち物をかくしたり、こわした		1	2	1	3		7(11.7%)
6. 暴力をふるった	3	3	4		2	1	13(21.7%)
7. お金などをたかった	1						1(1.7%)
8. その他	1				1		2(3.3%)

表 7 「他の子にいじめられる」の内容と頻度（複数回答）

内 容	1/時間以下	1/日以下	1/週以下	1/月以下	1/学期以下	無記載	合計 (N=60)
1. 冷やかされたり、からかわれた	11	14	6	3	1		35(81.4%)
2. グループに無視された	5	4	3	3	2	1	18(41.9%)
3. 仲間はずれにされた	5	6	4	2	2	1	20(46.5%)
4. ことばでおどされた	3	3	1	2	2		11(25.6%)
5. 持ち物をかくされたり、こわされた	1	4	4	2	3	1	15(34.9%)
6. 暴力をふるわれた	2	5	3	1	1		12(27.9%)
7. お金などをたかられた					1		1(2.3%)
8. その他	1	2	1	1		1	6(14.0%)

表8 いじめ・いじめられ予測式（ロジスティック回帰）

質 問 項 目 (Xi)	いじめる	いじめられる
性 (男=1, 女=2)	-0.597	-0.546
学年 (=1, 2, 3)	-0.422	-0.805
1 頭痛を訴える	-0.081	-0.136
2 腹痛がある, あるいはおう吐する	1.108	0.147
3 ぜん息がある	-0.098	-0.109
6 かんしゃくをおこす	0.227	-0.252
7 登校時に泣く, あるいは学校の中に入るのをいやがる	-2.086	1.82
8 理由なく学校を休む	-1.208	-2.506
9 どもる	-0.522	2.362
10 (どもり以外に) 話し方に問題がある	-0.079	1.546
11 ものを盗ったことがある	1.573	-1.271
12 好き嫌い, 食べない, 食べ過ぎるなど, 食事の問題がある	0.056	0.137
13 寝つきが悪い, 夜中に目をさます, 朝早く目をさますなど睡眠の問題がある	0.477	1.532
14 とても落ち着きがない。しばしば走り回ったり, とびはねたりする。じっとしていることがほとんどない	0.529	-1.231
15 もじもじ, そわそわしている	0.521	1.556
16 しばしば自分や人の持ちものをこわす	1.071	0.334
17 しばしばほかの子とけんかする	0.038	0.348
18 ほかの子に好かれていない	0.158	1.772
19 心配症で, しばしばいろいろなことを悩む	0.094	1.089
20 一人で物事をする。一人ぼっちの傾向がある	-0.424	-0.167
21 いらいらしている。すぐにおこりだす	0.295	-0.12
22 しばしばみじめそうな様子をみせたり涙ぐんだりする	-0.534	-0.009
23 顔をしかめたり体をピクピクさせたり, チックがある	2.102	-0.209
24 しばしば指しゃぶりををする	1.064	1.252
25 しばしば爪かみをする	0.416	-0.527
26 しばしば親のいうことに従わない	-0.688	-0.402
27 注意を集中できない	-0.757	-0.243
28 新しい物事や状況をおそれたり, 心配したりする	-0.538	-0.593
29 とるにたらないことを騒ぎたてる	0.871	0.806
30 しばしばうそをつく	-0.216	-0.077
定 数 (Ao)	0.329	0.17

注) 1. 表中の数字は「いじめる」「いじめられる」の有無(無=0, 有=1とした)に従属変数とし, 質問項目(点数は Xi)を独立変数とした場合のロジスティック回帰曲線の係数 (Ai)を表す。
2. ラター親用質問紙項目は, 行動が確実にみられた場合は2点, より程度が弱い, より少ない場合は1点, みられなかった場合は0点。表中の番号はラター親用質問紙の番号に対応する。
3. $Z=A_0+\sum_i A_i \cdot X_i$ とすると, いじめ・いじめられの確率予測式は, $P=1/\{1+\exp(-Z)\}$ である。

=1, 女=2), 学年 (=1, 2, 3) と母親が評価したラ氏テストの各項目得点(ただし, 「4. 尿失禁」「5. 便失禁」は除く)を独立変数とした。子どもの「いじめる」と「いじめられる」の予測確率(0から1の値をとる)は, それぞれ次のように算出する。
表中の係数を A_i (定数は A_0), 質問項目の点数

を X_i とすると, まず,
$$Z=A_0+\sum_i A_i \cdot X_i$$
を求め, 次の式に代入する。
$$P=\{1+\exp(-Z)\}^{-1}$$
以下に, 母親の評価ではいじめ・いじめられともに「なし」であったが, 子どもはいじめられたこと「あり」としたケースの計算方法を示す。

表 9 「いじめる」予測の適合性

		予測値		正解率
いじめる		p<0.5	p>0.5	
な	し	184	7	96.3%
あ	り	37	21	36.2%
全体				82.3%

表10 「いじめられる」予測の適合性

		予測値		正解率
いじめられる		p<0.5	p>0.5	
な	し	206	3	98.6%
あ	り	24	21	46.7%
全体				89.4%

例：女，中1。ラター項目は，「9. どもる」，
「10. 話し方に問題」，「14. 落ち着かない」，
「27. 注意散漫」がそれぞれ1点。
 $Z_{いじめる} = .329 + (-.597) * 2 + (-.422) * 1$
 $+ (-.522) * 1 + (-.079) * 1$
 $+ .529 * 1 + (-.757) * 1 = -2.116$
 $\therefore P_{いじめる} = \{1 + \exp^{-(-2.116)}\}^{-1} = 0.108$
同様にして，

$Z_{いじめられる} = 0.707$
 $\therefore P_{いじめられる} = 0.670$

2) モデルの適合性

表 9，表10に，それぞれ「いじめる」，「いじめられる」予測モデルの適合性を表す分類表を示す。確率が0.5より大きい小さいかで2群に分けた。子どもが「なし」と答えたうち予測確率が0.5未満の正解率（特異度に相当しよう）は，「いじめる」96.3%，「いじめられる」98.6%と非常に高値で，後者は母親による評価を上回っていた。また，子どもが「あり」と答えたうち予測確率が0.5超の正解率（敏感度に相当しよう）は，「いじめる」36.2%，「いじめられる」46.7%と，両者とも母親による評価を上回っていた。

Ⅳ 考 察

1. サンプリングの問題点

今回の研究では，前回⁸⁾に母親のみの情報から論を進めた方法上の弱点を補う意味で，子ども自

身にいじめ・いじめられ体験の有無をきき，母親の評価と合わせた。母親用と子ども用の質問紙を別々に記入してもらい，最終的にそれらを一致させた。子どもにとっていじめ・いじめられ体験は母親にさえも秘密にしたい事項であろうから，嘘や偽りなく記入してもらうために，匿名性の維持，質問紙の厳重な密封や質問項目の簡素化を図った。それでも，子どもの回答の中には，いじめられ体験は答えてもいじめ体験は答えなかったのが数例あった。当然，いじめ・いじめられが「なし」と答えた群や未回答の群の中にもいじめ・いじめられ体験の豊富な例が多数含まれていた可能性がある。したがって，今回の調査だけでは子どものいじめ・いじめられの正確な頻度を求めることはできない。また，厳密に言えば，今回の一般群と知人群は同じ基準で選択された集団ではないが，一般性を失わないために異質の集団からできるだけサンプルを集めてそれらをいっしょにして分析を進めた。そのために結果の信頼性が多少犠牲になったかもしれない。今回の方法は面接法に比べればいじめ・いじめられ体験の有無を子どもが抵抗なく記入しやすいが，それらの体験の真偽については確認のしようがない。とりあえず，子どもの申告をそのまま信用していじめ・いじめられの確率予測式を求めることにした。さらに，母子の質問紙ともに「いじめ」という用語を定義なしで使い，子ども用の質問紙ではいじめの内容を質問の形で具体的に列挙したので，母子でいじめの外延と内包に最初から差異が生じていた可能性がある。

2. いじめについての母子認知

登校拒否の原因や予後について中学教師と親の意識にずれがある¹¹⁾のと同様に，「いじめ」という普遍的な現象に対しても，子ども，教師と親の間に認識上の相違があることが考えられる。以前の著者の報告⁸⁾では，母親が子どものいじめを過小評価し，いじめられを過大評価しがちだと予想して，いじめ関連群を操作的に加害群と被害群に分けたが，今回の研究の目的のひとつはその仮定を検証することである。

表 3 と表 4 の結果から，偽陽性率と偽陰性率を求めると，「いじめる」については偽陽性率1.0% (=2/194)，偽陰性率88.3% (=53/60) で，「いじめられる」については偽陽性率2.4% (=5/

212), 偽陰性率33.3% (=16/48) であった。「いじめる」の偽陰性率と「いじめられる」の偽陽性率が高いことがわかる。つまり、子どもが他の子进行いじているのに母親はいじめていないとする過小評価と、子どもが他の子にいじめられていないのに母親はいじめられているとする過大評価の傾向があることが認められた。もっとも、子どもが「他の子进行いじめる」と「他の子にいじめられる」ともに、母親の特異度の高さに比べて、母親の敏感度は前者11.7%, 後者33.3%と低く、母親は子どものいじめ・いじめられ(特に前者)を正しく把握しているとはいえないから、上記の結果は母親の主観的な判断の一つの傾向を示しているように思われる。

3. 「いじめる」と「いじめられる」の関係

以前の著者の報告⁹⁾では、いじめ関連群のうち「純被害群」が「純加害群」より多く、少数の「いじめっ子」が多数の「いじめられっ子」进行いじているという図式を想像した。しかし、今回の子ども自身の申告では、純加害群が純被害群より多かったことと、それらの間に、混合群が位置していたことが特徴であった。また、3群のラター得点を比較すると、純被害群と混合群が近接していた一方で、純加害群はむしろ非いじめ群に近い傾向を認めた。ここで、純被害群と混合群を合わせると43人(16.9%)で、純加害群の14.6%より多かった。つまり、上記の図式があてはまるとすれば、純被害群と混合群を合わせた群をいわゆる「いじめられっ子」とし、純加害群をいわゆる「いじめっ子」と称するのが妥当かもしれない。いずれにせよ、「いじめっ子」が同時に「いじめられっ子」、あるいはその逆であるという混合群が9.1%もあったことは、「いじめ」という現象を考えるうえで看過できない事実といえる。

文部省の資料¹⁰⁾によると、平成6年度に公立中学校で発生したいじめは延べ38,458件で、その態様は、①冷やかしのからかい26.0%, ②暴力18.6%, ③言葉での脅し17.7%, ④仲間はずれ13.7%, ⑤集団による無視7.0%, ⑥持ち物隠し6.8%, の順であった。今回の研究では、「他の子にいじめられた」延べ118件のうち、①冷やかしのからかい29.7%, ②仲間はずれ16.9%, ③グループによる無視15.3%, ④持ち物隠し12.7%, ⑤暴力10.2%, ⑥言葉での脅し9.3%, の順であっ

た。つまり、文部省の資料と比べて、前4者が多く、後2者が少なかった。前4者は後2者よりも直接的な攻撃の傾向が弱く、心理的圧迫によって苦痛を与える方法である。今回の対象者がわが国の中学生の母集団を代表しているという保証はないが、この結果によって、学校側には把握されていない陰湿ないじめで子どもが苦しんでいるという実態の一端を垣間みることができよう。また、子どもの側からの「他の子进行いじめた」よりも「他の子にいじめられた」という訴えの割合と頻度が顕著に多かったことは、加害側の加害者意識の弱さとともに被害側の心理的苦痛の大きさを物語るものであろう。

4. 予測モデルについて

ラ氏テスト(親用, 教師用)は非常に簡便で、かつ子どもの主だった情緒障害や問題行動を網羅しており、現在、スクリーニング用としてこれに勝るものは得難い。もちろん、厳密な議論をするためには、子どものいじめに影響を与えそうな他の因子、すなわち、性格、家庭、友人、学校や地域特性などを考慮することが必須であろうが、今回は、子どもの客観的な様子をできるだけ簡便な方法で評価すると同時に、その結果を用いていじめを予測することを目標としたので、あえて質問項目を最低限に抑えた。

また、ラ氏テストの各項目のいじめ・いじめられへの寄与の程度をみるために、ロジスティック回帰分析の独立変数として強制的に全項目(陽性率の低い遺尿と遺糞の2項目は除く)を投入した。そうした理由は、第一にラ氏テストのすべての項目が子どもの情緒障害や問題行動の包括的な把握に適していること、第二にいじめに特異的な項目をラ氏テストから選択することは精神科の臨床経験上からも困難であること、第三に実際に項目数をいろいろ変化させてロジスティック回帰分析を実施してみても感度が最も優れていたのは全項目の強制投入法であったこと、などによる。といっても、今回のロジスティック・モデルはあくまでひとつの分析方法に過ぎず、前述の問題点やサンプル数と項目数との関係などにより回帰係数の安定性が必ずしも十分に確保できなかったばかりか、分析結果そのものがおおまかな推測にとどまらざるを得なかったので、改善する余地はかなり残されている。いずれにせよ、今回のロジスティ

ック・モデルの特徴は、性、学年とラ氏テストという少ない項目で、子どものいじめ・いじめられるの確率がある程度予測できることである。

ロジスティック・モデルの適合性を評価する方法はさまざまあるが、今回は最もわかりやすい分類表を作成した。その結果、「いじめる」の特異度をのぞいて、このモデルの予測結果が母親の評価を凌駕していた。とりわけ、被害を受けているために早めの対処が必要な「いじめられる」ことについては、敏感度が母親評価で33.3%であったのに、このモデルでは46.7%と半数近くが予測可能といえることができる。しかし、この結果をもって直ちにこのモデルの感度が母親の評価より優秀であるという結論を導くことには慎重でありたい。そのためには、今回得られた回帰係数を別の中学生（とその母親）の集団に適用して感度を比較検討する必要があるだろう。また、このモデルでは予測確率0.5以上を事象「あり」と推定したが、いじめの場合、特異度よりもむしろ敏感度を上げる方向でカットオフポイントを設定した方が実際のと考えられる。その点も今後の検討課題としたい。

今回提案したいいじめの予測式は、母親だけでなく、父親、きょうだい、担任、養護教諭や相談員・治療者など、子どもに身近に接している人であれば誰でも記入することができる。したがって、多少、おおざっぱであることは免れないが、いじめの早期発見に役立てることが可能であり、いじめ対策上有用な道具となり得ると思われる。今後、さらに多くの中学生にこのモデルを適用し、必要に応じて内容を刷新するとともに、小学生や高校生などにも利用できるモデルを構築して行きたい。

この研究にこころよく協力してくださった千葉県某

市教育委員会の林忠先生、国立精神神経センター精神保健研究所の藤井和子先生、北の丸クリニックの菊池章先生、中島聡美先生、小林綾子さん、東京学芸大学の田村毅先生、小原クリニックの小原基郎先生などに感謝いたします。

なお、今回の研究の概要は山形市での第54回日本公衆衛生学会で発表した。

(受付 '96. 1.18)
(採用 '96. 6.19)

文 献

- 1) 江川玟成. いじめ. 山田通夫, 編. 精神科 Mook 18家庭と学校の精神衛生. 東京: 金原出版, 1987; 118-126.
- 2) 斎藤浩子. いじめっ子・いじめられっ子. 藤原喜悦他, 編. いじめっ子いじめられっ子・校内暴力の診断と治療. 学校教育相談実践シリーズ6. 東京: 教育出版, 1985; 43-58.
- 3) 詫摩武俊. こんな子がいじめのこんな子がいじめられる. 東京: 山手書房, 1985; 48-51.
- 4) 小林 剛. 最近のいじめっ子・いじめられっ子の特徴. 教育心理 1986; 34: 700-703.
- 5) 西川光三. いじめの早期発見・行動観察. 教育心理 1985; 10: 915-917.
- 6) 倉本英彦. 一般中学生の不登校等の問題行動と精神保健に関する疫学調査. 日本公衛誌 1995; 42: 31-43.
- 7) 倉本英彦. 一般小学生の不登校等の問題行動と精神保健に関する疫学調査—一般中学生との比較より一. 日本公衛誌 1995; 42: 930-941.
- 8) 倉本英彦. 母親からみた子どものいじめ・いじめられと精神保健. 学校保健研究 1995; 37: 240-250.
- 9) 松浦雅人, 他. ラター質問紙を用いた小児の問題行動に関する調査. 社会精神医学 1990; 13: 124-132.
- 10) 総務庁青少年対策本部, 編. 平成7年度版青少年白書. 東京: 大蔵省印刷局, 1996; 181.
- 11) 岡野高明, 他. 中学教師および親を対象とした登校拒否に関する意識調査. 小児の精神と神経 1989; 29: 271-279.

PREDICTION OF *IJIME* (BULLYING)

Hidehiko KURAMOTO*

Key words: Bullying (*Ijime*), Junior high school student, Mother-child different patterns of recognition, Prediction of *Ijime*, Logistic regression

Questionnaires about *Ijime* (bullying) and *Ijimerare* (being bullied) were given to 261 junior high school students and their mothers from July to September in 1995. There were two types of questionnaires, one for the child, which inquired about his experiences of bullying other children and being bullied by other children during the last year, and the other for the mother which assessed the child's emotional and behavioral problems in the last year, was the Rutter Parental Questionnaire (R.P.Q.). These two questionnaires were filled in separately in order to avoid consultation between mother and child about their contents.

Analysis of level of recognition of *Ijime* and *Ijimerare* by the mother showed a sensitivity level of *Ijime* and *Ijimerare* of 11.7% and 33.3%, respectively. The specificity on the part of the mother was 99.0% and 97.6% for *Ijime* and *Ijimerare*, respectively. While the specificity was sufficiently high for both phenomena, the sensitivity was low particularly for bullying other children. This underestimation may suggest the mother's psychological tendency to overlook the child's bullying of other children.

A cross tabulation of the children's responses to "*I bullied other children*" and "*I was bullied by other children*" was made. A total of 254 cases were divided into the *ijime group* (n=80) and the *non-ijime group* (n=174), and the former was further divided into the *aggressor* (n=37), the *victim* (n=20) and the *mixed group* (n=23). The average R.P.Q. scores of the *victim* and the *mixed group* were very similar at 7.4 and 7.1 points, respectively. Those of the *aggressor* and the *non-ijime group* were 4.6 and 3.8 points, respectively.

A logistic regression analysis was performed and a predicted equation for probability of *Ijime* and *Ijimerare* was deduced. Using this logistic model, the specificity and the sensitivity were calculated and were compared to those estimated by the mother. From this, it could be seen that, although the specificity was high in both estimations, the sensitivity estimated by this model was considerably better than that by the mother, especially in the prediction of *Ijimerare* which amounted to almost fifty percent accuracy.

Because no information other than sex, school year, and the R.P.Q. scores (excluding enuresis and encopresis) are necessary, this model seems to possess convenience and a broad range of adaptability.

* Kitanomaru Clinic.